



学校だより

6月号
横浜市立桜台小学校
令和5年5月31日発行

“相手”を意識する力⇔想像力と思いやり

副校長 柴 諭

新しい学年になって2か月が経ち、子どもたちは新しい学年・学級での生活にも慣れ、学習や行事など様々な機会を通して他者とのかかわりも増えてきました。桜台小学校には、子どもと教職員とを合わせて常に600人近くもの人がいますが、子どもたちはこの2か月間でどれくらいの人とかかわりを持ったでしょうか。名前はわからなくても、直接対面していなくても、そこには本当にたくさんの“かかわり”があり、“相手”がいます。

“相手”を意識することで生まれる、一番簡単で、そして、大切なものがあいさつです。

今年最初の朝会で、小宮校長から「あいさつの大切さ」についてお話があったことを子どもたちも覚えているのではないのでしょうか。互いの存在を認め合い、また、気持ちを伝えることができるあいさつは、人と人のかかわりのいちばんの基本となるものです。「おはようございます」や「さようなら」はもちろん、「ありがとう」や「ごめんなさい」など、相手を認め、思うからこそ発せられる心からのあいさつが、人と人との間をスムーズで滑らかなものにします。あいさつが響きあう空間は、「安心して過ごすことのできる、かけがえのない場所」となるのです。

5月半ばごろ、朝の校門では、委員会活動の取組として「あいさつ運動」が行われていました。担当する5・6年生がプラカードを持ちながら登校してくる子どもたちに明るく、さわやかにあいさつをすると、同じように元気なあいさつが応えられていました。委員会のお兄さんお姉さんがいない時でも引き続き、あいさつが「心のやまびこ」となり、お互いをつないでいくことを期待しています。

“相手”を意識することで、言葉や行動には変化も生まれます。

写真は、ペアで回った新体力テストのひとつ。初めての新体力テストに臨む1年生をリードする6年生の様子です。お手本を見せたり手伝ってあげたりするのはもちろん、たくさんの種目に挑戦する1年生の様子をしっかりと感じ取り、「つかれてない?」「水も飲むといいよ」「お手洗いは大丈夫?」などと気遣って、やさしく声をかける姿をあちらこちらで見かけました。

同じ学年の友達同士でかかわるだけでなく、違う学年の子たちと接することで、子どもたちの想像力はたくましく発揮されます。“相手”を意識し、思いやり、相手にとってプラスになるのではないかと考えた言葉をかけ、行動をする。そんなことが自然にできるのです。

相手が誰であっても、互いの存在を認め、思いやって言葉を選び、行動することができる。決して簡単なことではないけれど、誰もが大切と感じていることを、学校としても十分に価値づけて、指導を続けていきたいと考えています。

